

3. 守る活動

(3) アズマヒキガエルの保護活動

岐阜市梅林公園において、コイによる卵・幼生の食害を防ぐためのネットを毎年設置している。その結果、多数の幼体が上陸できる状況を維持し、平野部で減少する個体群の保全に成果を上げている。

一時期は、産卵に訪れる成体が0であった年もあったが、高校生の活躍で命を繋いで、今では、春の繁殖期に多くの成体が訪れて、『蛙合戦』が見られるようになっている。

岐 阜 新 聞

2021年（令和3年）3月18日 木曜日 西濃地域

アズマヒキガエル、コイから守れ

池に切り網を設置する大垣北高校自然科学部の生徒ら有志。岐阜市梅林南町、梅林公園。

岐阜市の希少生物 大垣北高生が仕切り網設置
梅林公園の池



池の中に産み付けられていたアズマヒキガエルの卵。同

岐阜市版のレッドリストで将来の絶滅が心配される「準絶滅危惧」に分類されている、アズマヒキガエルの卵やオタマジャクシがコイに食べられないように、大垣北高校（大垣市巾川町）の自然科学部の生徒ら有志が17日、岐阜市梅林南町の梅林公園の池に仕切り網を設置した。

アズマヒキガエルは体長4〜16センチで、東日本に広く分布していたが、開発に伴い平野部で急減。市内でも生息地は金華山周辺の数カ所に限られる。

同公園では、県野生生物保護推進員で同校の高木雅紀教諭（55）が2016年から、卵からふ化させたオタマジャクシを池に戻すなど保護に取り組んできた。仕切り網の設置は18年から始め、幼体が上陸する5月末までコイとすみ分けられるようにする。

高木教諭と同校自然科学部の2年生3人、岐阜大地域科学部の向井寛彦准教授（50）、世界淡水魚園水族館（アクア・トリト）の飼育員2人の計7人が、長さ約5メートルの網を協力して設置した。

池の成体は一時ゼロになったが回復しつつあり、この日も成体や卵が発見された。同校の井上歩実さん（17）は「網を張ることで卵がでるだけ多くの成体に育ってほしい」と話していた。（土屋健一）

岐阜市のレッドリストⅠ類

ガマガエル絶滅回避に道



岐阜市で生息が激減しているアズマヒキガエル写真の保護活動が、市内の公園で続いている。11年目の今年の繁殖期には、これまでで最高の115匹が現れ、雌を複数の雄が奪い合う「かわず合戦」と呼ばれる行動も確認された。「ちよっと手をかけてあげると、絶滅を防ぐことができる」と関係者は手応えを感じている。

(堀尚人)

県内全域に分布する体長4～16センチの褐色の大型のカエルで、ガマガエルの俗称で親しまれてきたが生息が激減している。

高校教諭ら保護活動11年

魚よけ網設置、繁殖行動増える



マヒキガエル保護のため、コイよけの網を張る学生、教員＝岐阜市内

り2段階引き上げられた。幼生を育む水辺が市街化で失われたり、陸地とをつなぐ水陸移行帯「エコトーン」が道路で分断されたりしており、アライグマやタヌキ、イノシシの被害と合わせ市内の平野部では絶滅状態とみられている。

保護活動は2012年、高木雅紀大垣北高教諭(57)が、当時の勤務先だった岐阜高校自然科学部の生徒らと始めた。1～2匹分の卵塊を確認したため、一部を

持ち帰ってふ化させて戻したが、なかなか個体数が増えなかった。

オタマジャクシが池のコイに食べられてしまうと考え、16年から池を管理する市の承諾を得て柵や網を設置するようになった。すると、繁殖期に現れる成体が増え始め、21年20匹、22年74匹(いずれもピーク時)と徐々に

18年から活動に参加し、網の改良などを助言した向井貴彦岐阜大地域科学部

教授(保全生態学)は「『ほかにいるから』ではなく、地域の遺伝子を残すことが大事。生き残っているならば改善できる」と説く。

今季のピークは3月16日で、「クックック」という鳴き声が響く中、産卵直前の雌を背中から雄が抱きかかえる「抱接」や、雌に群がる雄を先行した雄が後ろ足で蹴り散らす様子などが見られた。卵塊の数も12匹分ほどになった。

「感激した。みんなで手探りでやってきたことが実った」と喜ぶ高木教諭。3月23日には、大垣北高の自然科学部員や岐阜高卒業生ら13人で仕切り網を設置した。「カエルが嫌いな人もいるかもしれないが、心が和んだり、子どもたちが『すごい』と思ったらいい」と活動に理解を求めている。

卵塊はふ化して5～6月ごろ幼体になって上陸する。この池の保護活動は、4月9日まで世界淡水魚園水族館アクア・トリトネ(各務原市)の企画展で紹介されている。



新聞
動画